〈追悼文〉

野村先生のこと

あいクリニック神田
西松能子

野村先生が今年の1月25日に逝かれたことは皆様の記憶に昨日のように刻まれていることでしょう。医師の常として計ったように旬日をたがわず旅立ち、わたくし共のクリニックの当時4人だった常勤医は今では2人になりました。大学を退官されるにあたり、野村先生らしい押しつけがましくない声音で「いやーいろんなお誘いはあるけど、ここで働こうと思っているんだよ、それに先生は学位指導医だからさ」と苦笑いしながら話されたのは、つい2年あまり前のことでした。退官され、クリニックで働いてくださるようになるとまもなくコロナ禍になり、私も院長である鬼頭先生も手弁当で働いているのも見た野村先生は「僕だけもらうわけにはいかない」と言い出しました。そして、クリニックの他の先生方にも状況をお話しされ、医師が全員協力してくださることになったのです。その年、クリニックのスタッフは例年と変わらない給与を得ることができました。野村先生は一見穏やかで淡々と静かに仕事をされる先生でした。「いやー先生みたいに体力ないからねー」などと言い、医者というより文化人のような立ち居振る舞いが印象的でしたが、九州人らしい内に秘めた意志を感じたことでした。一緒に常勤として働き始めると間もなく、なによりその広い人脈に驚かされました。誰に対しても、私どもになさってくださったと同じように「その時その人が必要とする大事なこと」をされていたからこその人脈だろうと改めて思いいたります。人脈の中には、医師のみならず著明な心理療法家の先生方もおいででした。「あー、東大の大学院時代からの知り合い」だったり、「勉強会の仲間」だったり、「府中（刑務所）からの知り合い」だったり・・・その先生方と長く厚誼を保つには、どのようにひっそりと「その時その人が必要とする大事なこと」をされていたのでしょうか。当院の心理スタッフは全員野村先生のファンでした。心理士の勉強会にもそれこそ手弁当で参加し、なにくれと面倒を見てくれていました。

私のいま1つの仕事場の大学でも、何かの折に「野村先生が亡くなられたの

で・・」と申しましたら、大学の同僚が「え、あの野村先生、いやテニスにおいでないから・・え、昨年まではテニスにおいでていろいろ話してくださって」と涙ぐみ、いかに野村先生に世話になったかを話しだしたのです。亡くなられた後、野村先生のことを話すたびに、様々な異なる場でその影響する力に驚かされました。わたくしどもには多くの野村先生の著書が残されています。最晩年の生産性こそがなさりたかったことだろうと大事な宝物として大事にしていきたいと思っています。